

コラム9

多文化社会における相互承認

——チャールズ・テイラーは世界の秩序をどのように考えるのか

梅川佳子

チャールズ・テイラーは、今日の多くの政治的紛争が、自己や自己の属する集団のアイデンティティの承認 (recognition) の要求、あるいはその要求のための闘争に由来すると述べている。ここでは特に3点について考える。

第1にナショナリズムの問題である。ナショナリズムの主張の背後には、承認を求める政治的な心理が存在する。しかし、ネイションとしての誇りを承認してほしいという政治的心理が、周囲の諸国に拒否されるとき、これに対する承認のための運動として、ナショナリズムの政治力学が生み出される。

第2に人種の問題である。現代社会では、多くの国や地域に少数派の人種集団が存在する。その集団が自分たちの文化的アイデンティティを維持しようとするとき、その周囲に対して、アイデンティティの承認を請求する。

第3に宗教や文化の問題である。多数派の宗教意識が組み込まれたアイデンティティと、少数派の宗教意識が組み込まれたアイデンティティの間の衝突は、例えばフランスではスカーフ問題、アメリカでは学校での祈祷の問題などをめぐって生じている。現代の公共圏の中で、異なる宗教意識をもつ人々がどのように共存することができるか、という問題を考える必要がある。

これらの点に関して、チャールズ・テイラーは、各個人のみならず、各集団のアイデンティティの尊重もまた、相互承認や他者の差異性 (他者性) の承認の認識のために不可避的な前提条件であると考えている。われわれのアイデンティティの一部は、他者による承認、あるいはその不在、さらには歪められた承認によって形作られると考えるからである。とりわけ、個人が、抑圧された少数派の集団に属している場合、個人のアイデンティティが承認されるためには、その集団全体が他の集団と平等な承認を与えられる必要がある。

テイラーは、青年のころから、デカルト主義や

アトミズムを批判し、個人のアイデンティティが、外界との関係の中で形成されることを強調していた。彼は、最初の単著『行動の説明』(*The Explanation of Behaviour*, 1964) の中で、人間の行動を、単なる外界からの刺激と反応によって機械的に説明しようとする当時の行動主義心理学を批判して、主体の自由を強調しながらも、人間の行動が環境から影響を受けること自体は認めている。環境は、複数の人間にとって共通である。彼は、個人の行動に対する外界からの制約を認識しており、人間の共通性や集団の側面を認めていた。こうした彼の考え方は、個人および集団のアイデンティティを承認する必要があるという、後の彼の思想に連なっていくと思われる。

テイラーは、近年、カナダのケベック問題についても熱心に論じているが、このときの承認は、政府が、個人の一定の権利を保障しつつ、文化的多元性と差異を促進すべきとするものであり、特定の共同体の善や文化を存続させるための政策を支持する理念である。この際のナショナルな文化的承認は、国民国家内部の問題である。

しかし実は、承認の問題は、理論的には国民国家内に限られるものではない。ナショナリズムに限ってみても、これは国家をこえた世界における紛争を引き起こす。人種や文化などの問題も同じであり、征服者と先住民の関係の問題なども同じである。

さらにテイラーは、イスラム教の人々のアイデンティティを、世界規模の公共圏のなかで、いかに活かすかという問題についても触れている。しかしながら、その議論は、まだ本格的にはなっていない。そこで、テイラーの国内での相互承認の議論を、世界大の本格的な理論として発展させるためには、テイラーの国内での承認の理論構成のアナロジーとして世界における承認問題を考えてみる必要もあるかもしれない。しかしグローバルイゼーションの現状からすれば、アナロジーが成功する可能性は大きくはないだろう。

さらにテイラーの相互承認論は、規範的な議論であり、これが規範論としての枠をいかにして脱却して現実的な議論になることができるかという問題をもっている。この弱点をいかに克服するかという点は、今後の課題として残されている。

